

ニワトリの獣医師と呼ばれて 9

～一命懸命から一生懸命へ～

白田 一敏

ニワトリの病気Ⅱ 伝染病学!?

学科の専門過程に入ると獣医師のタマゴたちは、待ちに待っていた『それらしい講義』を次々と経験することとなる。

- 一、動物の進化の過程を学ぶ発生学
- 二、動物の正常な構造を肉眼的なレベルで学ぶ解剖学
- 三、構造を顕微鏡レベルまで掘り下げて学ぶ組織学
- 四、各臓器の正常な機能と役割を学ぶ生理学

といった具合だ。このような科目は、獣医学科では基礎系と呼ばれる。筆者たちは、午前中に基礎系の講義を受け、午後にはその講義の実習(実験)を受けるのが日課だった。専門課程の講義・実習も板についたある日のこと。ふと同級生に、

「基礎系の講義は、『獣医師』って感じしないナー！」

と筆者は話し掛けた。

「そうだよナ。俺も同感！ 何か高校の理科実験を延長したみたいだもんナア」

と級友Aが応える。

「解剖実習は動物ごとに臓器の形

態に特徴があるから生理学や生化学の実習よりマシだけどもね」

とは級友Bの意見。

「手術とか、レントゲンとか、ガツンとくるところを早くやってみたいよね」

と級友Cもうなずく。後追いで筆者が言った。

「ホント、何か物足りないよな〜！」

同級生みんなの頭の中でイメージする「獣医師像」は個々で異なっていたようだが、初めての解剖実習で感じたような神聖な気持ちは徐々に薄れている。マンネリ化してきたのである。筆者たちは何に飢えていたのだろうか？ そう、「病気との関わり」を欲していたのである。

基礎系の学問は、野球を例にとるとキャッチボールやバットの素振りのようなものだ。実際の野球プレーには非常に大切な基本であるが、少々退屈だ。実戦の方が楽しいのは何についても同じことである。まして、多くの学生たちの獣医師像は、かっこよく病気を治すことだから、

病気と縁遠い講義や実習は、どうしても面白くない。

多くの学生にとつての実戦イメージは、『犬や猫の診療や手術』である。少し枠を広げれば、『牛、馬、豚などの大動物の診療』も含まれる。

したがって、学生が興味を持つ講義・実習は、内科のような診療に関わる科目や、切った・貼ったの手術を行う外科といったものであった。一方、筆者が目指すのは

「ニワトリの獣医師」

なのである。当然のことであるが、ニワトリには手術など必要ない。どうしてかって？ 悪くなったら迷わず淘汰ですよ。なぜ治そうとしないの？ そりゃ、経済的にペイしないから！！ これ、養鶏産業の常識。

筆者が育った採卵養鶏場では、経済的にペイしないものは淘汰が常であった。全くの健康体であるオス雛を含め、病気の個体や五体満足でないものはすべて淘汰の対象なのである。そんな習慣が骨身に染みた筆者には、獣医師像として求めているものが必然的に他の学生とは異なっていたのである。したがって、様々な科目と平行して内科・外科といった人気科目の講義が始まって物足

りない気持ちのままであった。

そんな筆者の気持ちも満足させてくれたのは、伝染病学であった。

「ニューカッスル病は、ニワトリで大きな被害を起こす重要な疾病で、英語では、Newcastle Disease という。一般には頭文字をとってNDと略します。よく覚えておくように！」

講義してくださった先生は、現在ではQ熱で有名になった恩師のH教授。

「これだヨ。これだ!!」

NDという略称を聞いて著者は、少年時代から馴染み深い名称に大きく反応した。

そうなのだ。筆者がぼんやりと追いつめていたものは、『伝染病学』であったのだ。伝染病学の講義が進んでいくと、I B (Infectious Bronchitis: 伝染性気管支炎)、I L T (Infectious Laryngotracheitis: 伝染性喉頭気管炎)、M D (Marek's Disease: マレック病)、E D S (Egg Drop Syndrome: 産卵低下症候群)、A E (Avian Encephalomyelitis: 鶏脳脊髄炎)、I C (Infectious Coryza: 伝染性コリザ) などといった、馴染みのある病

名が次々と登場して筆者の興味をそそった。各鶏病の特徴を学ぶたびに、少年時代に何となく見ていた病鶏の姿が頭によみがえり、甘酸っぱい思い出と一緒に何とも言えない親しみを覚えた。もちろん、伝染病学はニワトリの病気だけを対象とするのではなく、ウシ、ウマ、ブタなどの家畜、ならびにイヌ、ネコなどの愛玩動物も含まれる。当然そちらも勉強することになる。不思議なもので、ある分野が好きになると、周りの事象も知りたくなる。『好きこそもの上手なれ』とはよく言ったものだ。

筆者は微生物学、衛生学、公衆衛生学といった伝染病学に関連する科目も好きになっていった。

特筆すべきこととして、ニワトリでは病気に関しウシやブタなどの家畜やイヌ・ネコとは全く異なる特徴がある。一般的に、病気と呼ばれる

ものの中には伝染病ではなく、人間で言えば生活習慣病のような類の病気も存在する。ウシに始まってイヌ、ネコには、生活習慣病がヒトと同様に存在する。

一方、ニワトリは基本的には個体管理されない。群で管理されるのである。極端に言えば、一羽のニワトリが重病に罹患している。それが鶏群全体に影響を与えなければ問題とされない。ニワトリを管理する上で最も恐れられるのは、鶏群全体が病気になることであり、病鶏が発生してそれから農場全体に波及しかねない、となればこれこそが大問題である。すなわち鶏群全体に伝染する病気(=伝染病)がニワトリという畜種においては、最重要のテーマとなる。『ニワトリの獣医師』を目指す筆者にとっては、伝染病学を制することが最重要というわけなのだ。

研究室訪問

筆者が通っていた獣医学科は、九つの研究室で構成されていた。獣医師として一般的にイメージされるような仕事や研究をする分野は臨床系と呼ばれ、内科や外科といった研究

いた。各研究室には、原則として教授、助教授、講師あるいは助手のポジションに二〜三名の先生がおられ、日夜研究に励んでいる。筆者の興味をそそった伝染病学は、H教授率いる微生物学講座が担当しており、かつニワトリを研究対象としていたので、早速様子を見に行っただった。ある日のこと。

「H先生、四年の白田です。研究室を見学させていただきたいのですが……」

H教授の部屋に行って恐る恐るお願いする筆者に対して、

「いいよ。ついでに先輩に聞いて何か手伝わせてもらったら……!!」

と、いとも気安く答えるH教授。講義では、一癖も二癖もあり、非常に気難しそうに見えたH教授であったが、予想外にあっさりと返答された。

「ありがとうございます」

早速先輩たちの控え室に行き、仕事の内容や様子を聞くことになった。研究室にて。

「え〜！ もう研究室に来たの〜？ この研究室は大変だよ〜。この研究室に入ると、そのうち血のシヨンベンが出るぜ」

A先輩の言葉に少々ショックを受ける。

「どういうことでしょうか？」
筆者は聞き返す。

「理屈より動け！ という主義なんだな！」
と先輩。

「まるで、体育会系の運動部みたいですね」

「そう、俺たちはこの研究室のことを体育会系微生物と呼んでるヨ」
平然と笑うのは、そばにいたB先輩であった。

ワクチン会社からのアルバイト

研究室に通信始めた当初は、毎日のように金魚のウンコのように先輩にくつついていろいろな実験テクニクを見学した。

研究室通いも慣れたある日。

「今日の日曜日、暇ある？」

とニコニコしているある六年生。

「特に約束はありませんが……」

「それじゃ、決まりね。朝九時に研究室に集合」

「何ですか？ どこに遊びに行くのですか？」

事情がよく飲み込めていない筆者

以前にも紹介したが、獣医学科内の情報はみんなて共有されていることが多い。当然この研究室での研究が厳しく大変であることは、筆者もウワサで知っていた。真夜中に獣医学科近くを通りかかると、いつでもこの研究室のある二階は不夜城となっていた。しかし目指すは『ニワトリの獣医師』である。

「簡単には後に引けない。厳しいのは承知の上」

「と思い、それから筆者は毎日研究室に通うようになった。」

が聞くと、

「違うよ。アルバイトだよ。」と
五年生のくだんのA先輩が答えた。

「何のアルバイトですか？」

「ワクチンのアルバイトだよ」

とは先の六年生。

「えー。勘弁してくださいヨ！！

嫌ですヨ。ワクチンのバイトはコ

リゴリしてるんです。僕は養鶏場で

育ったから、嫌というほどやらされて

きたんだからア！！

ところが、先輩方がワクチンのア

ルバイトと呼んでいたのは実は製薬

会社から頼まれた実験のことであった。先生は研究費を少しでも稼ぐために、こうした会社から手間のかかる試験を請け負っていたのである。この実験には先生をはじめ講座生全員が日曜日の朝から夜まで共同して試験を遂行するのである。もちろんバイト料はなし！ でも事情を聞いた筆者は安心した。

「是非、手伝わせて下さい」

研究室での実験は初心者筆者にとつては、目新しい技術の勉強である。当日、筆者を含めた七名の講座

生が集まった。

「今日、実施するのは何の試験ですか？」

と筆者はたずねる。

「IBの中和試験だ」

とはものなれた先輩。

「中和試験って？」

「中印ンカン印ンな筆者は問い返

した。」

「何だ。習っていないのか？」

と先輩の不審そうな声に

「教わったかな……？」

と筆者はしらばつくれた。

「とつづくに教えたじゃないか。馬鹿！」

筆者の背後からいきなりY先生の

声が響く。

「ゲッ」

顔面から血の気がすつと引いてしまった。

「中和試験とは抗原抗体反応を利用した検査の一種で、精度の高い検査方法だ。とても手間がかかるけれどネ。今回は、一定量の抗原（このときはIBウイルスを使用した）と一〇倍に段階的に希釈した血清を一定時間反応させた液を十日齢の発育鶏卵に接種する」

よく理解していない筆者をカバーするようにY先生は改めて説明された。

「何を手伝いましょうか？」

と気を取り直して筆者は尋ねた。

「白田は、初心者だから卵殻表面の消毒と接種口の穴あけだな」

六年生の指図で作業はスタートした。わずかに四畳半ほどの無菌室に総勢七名がギューギュー詰め状態で試験を行った。その際、雑菌が入らないように、すべての作業を炎のそばで行う。炎で上昇気流を作り、空気中の雑菌を落下させないようにするわけだ。ただでさえ、狭い部屋に七名。おまけに作業中は常にガスバーナーがガンガン燃えている。ガス

バーナーで作り出した上昇気流を乱さないように、私語は原則禁止。全員汗だくになりながら、黙々と作業を続けたものだった。今考えると相当大掛かりな試験だったのだろう。結局すべての試験が終了したのは、午後九時頃だった。トータルで十二時間も作業していたことになる。試験終了後、夜の研究室でこれも恒例なのであろうか、酒盛りが始まった。体中の水分が充分抜けたところでのビールは格別だった。後からお聞きした話だが、正式配属される前の四年生がこの「アルバイト」を手伝ったのは初めてだったらしい。先輩方も筆者に声をかけるか否かを迷ったが、筆者を「使える奴」かどうかを見極めよう、ということでお声がかかったらしい。

筆者にとってこの「アルバイト」は、先輩方からのささやかな洗礼となった。この洗礼をクリアしたお陰で、正式配属前であったが研究室の一員として認知された。このアルバイトは、筆者が正式配属される頃には別のテーマで急に忙しくなったので次第に実施されなくなったが、研究室では相変わらず土日祝日なしといったペースで昼夜問わない生活が続いた。もっとも筆者にとっては、少年時代に養鶏場で「土日祝日なし&盆正月なし」という生活であったので、抵抗なくこの生活を受け入れることができたのだ。

唐突な話だが、筆者には小学一年生を頭として現在三人の息子がいる。この春に初めてわが子を学校に通わせた。その親の立場から見ると、

現在の教育ペースに一抔ならぬ不安を感じる。こうした不安は、筆者だけのものではないらしい。書店では、「ゆとり教育」と称されるシステムを批判する書籍が、「所狭し」と並んでいる。この種の不安を筆者が感じるのは、何も教育の現場だけではなく、日本の社会に關しても同様だ。主体的に働く意思のない社会人にとって、稼働日が一カ月の六割ほどしかない月も珍しくない。

「こんな事で、日本は勝ち続けることができるのでしょうか？」

最近筆者はこのようなことを頻繁に考える。これからわが国も「勝ち組」と「負け組」の社会へと変遷するのであろう。個人としては「勝ち組」に入りたいためである。冷静に考えると、人間の基礎能力なんて各

人でそう大差ない。その差は、各自の境遇、努力、そして運の総合評価で生じる。そのような観点から振りかえると、大学の研究室(体育会系微生物)で過(こ)した昼夜を問わない生活は、養鶏場での生き物を対象とした仕事を経験したことで併せて、筆者にとって良質な土壌となっていると感じられる。筆者がピーピーキューシーに奉職して後に接した養鶏経営者は、その社会的責任を果たすべく、休みなく働いている。このような人々と接し、刺激を受けることができる「ニワトリの獣医師」の仕事は、本当に恵まれたものだと思感している。

(筆者・(株)ピーピーキューシー 品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)